

「錦絵に見る明治初期の経済と産業」

展示品解説

東京名所海運橋五階造眞圖【展示番号 1】



開業当時の第一国立銀行。左下に見える海運橋は日本橋一丁目と兜町をつなぐ。

銀行制度の整備は、明治初期の殖産興業政策を支える大きな柱であり、第一国立銀行の開業（1873年7月）は、その象徴的な出来事であった。この錦絵が示すその偉容は、こうした経済的背景を示して余すところがないものであるが、それだけでなく、この建物の本来の主であった三井組の思惑や、施工にあたった清水喜助（二代目 1815-1881 清水建設の基礎を築いた）の西洋建築に向けられた眼差し、さらには、広く当時の文化的な様相をも示す、複数のコンテキストが絡み合った興味深い図像となっている。

設計・施工をおこなった清水喜助は、宮大工として伝統的な技術を有するだけでなく、横浜居留地の建設も手掛けた、和洋両風に通じる棟梁であった。設計にあたっては、5回にわたり改訂の手が加わり、旧時代の価値観を踏まえつつ文明開化の象徴たりうる建築を、という三井組の希望を体現した、後世のいわゆる「擬洋風建築」の最高傑作と評されるものに仕上がっている（1872年7月竣工）。下の二階は洋風であるのに対し、屋根は千鳥破風と唐破風の付いた入母屋造という寺院や城郭に見るような形で、その上に物見の塔が乗っている。この錦絵では、上部の旗に「バンク」と記されているが、別版では「三井組」と記されているものもあり、譲渡の前後の変化を知ることができる。

この建物は、建設後まもなく東京の新しい名所となり、数多くの錦絵に刷られることとなった。これらは、旅行者の土産として各地に持ち帰られ、職人への影響も絡めて、国内における洋風建築の普及に一定の役割をはたしたことが指摘されている。また、この錦絵は、この建物が1898年に取り壊されたあと、往時の様相を復原するにあたり、各種の写真と併せて、もっとも詳細かつ写実的な資料として用いられたことでも知られる。

寫真名所一覽東京海運橋三ッ井為替座【展示番号 2】



【展示番号 1】を、別のアングルから描いたもの。右手の旗に「三井組」の文字が見え、第一国立銀行に譲渡される（1872年9月1日）前の様子を描いていることが分かる。前図とは画工・版元ともに異なるが、「西洋形五階造り、唐銅柱其他瓦外廻りすべて唐銅を用ゆ、高サ拾貳丈余、間口拾五間、奥行貳拾八間余」の説明は同じである。

東京名所之内駿河町三井銀行【展示番号 3】

駿河町（現・中央区日本橋室町）三井銀行は、三井組が海運橋の建物を第一国立銀行に譲渡せざるを得なくなった後、それに代わる本拠地として建設された（1874年2月竣工当時は「為換バンク三井組」）。設計・施工は、同じく清水喜助であり、意匠は前作に比べるといくぶん抑制されているが、三井組にとっては、自身の社会的地位を象徴的に示そうとした、海運橋の建物と同じ意図によるものであると言える。この点は、屋背に乗るシャチホコが、単なる和洋折衷における和風要素としてではなく、近世日本建築における社会的地位を示す象徴として採用されたことから窺えよう。この建物も、第一国立銀行と同じ時期に取り毀されており、この錦絵は往時を偲ぶ貴重な史料となっている。



参考文献

- 佐藤康宏「小林清親の東京名所図：『海運橋』を中心に」『美術フォーラム 21』18: 55-59, 2008
- 初田亨「海運橋三井組為替座御用所の建築について」『日本建築学会論文報告集』253: 133-140, 1977.3
- 初田亨「駿河町（三井組）為替座御用所の建築について」『日本建築学会論文報告集』262: 157-164, 1977.12
- 初田亨「西洋建築の導入と職人」『講座日本技術の社会史 7 建築』p.217-248 日本評論社 1983.12
- 初田亨『模倣と創造の空間史：西洋に学んだ日本の近・現代建築』新訂第2版 彰国社 2009.4
- 堀越三郎『明治初期の洋風建築』南洋堂書店 1973.8（1929年12月丸善刊の復刻）
- 『三井銀行：100年のあゆみ』日本経営史研究所 1976.7



宮中養蚕の様子を描いた美人画。開港後の日本において、生糸は、輸出品の第一に数えられ、殖産興業の中心を占める存在であった。宮中における養蚕は、国家の中枢たる皇室が「範を国民に垂れさせ給う」ことを目的に、当時の皇后（昭憲皇太后）が渋沢栄一を世話役として1872年に始めたもので、その後、1873、1874、1879年と続き、今日まで引き継がれている。

この時代、宮中養蚕を主題にした錦絵は少なくないが、ここに登場する皇后（左図で扇を持つ）や女官達の姿は、直接見聞して描かれたものとは考え難い。実際の宮中養蚕において中心的な役割を担ったのは群馬県佐波郡島村（現・伊勢崎市）の農婦であり、緋袴・小袖姿という伝統的な装束の女官を配するこの図柄は、実態を写したものというよりは、むしろ、江戸末期より流行していた養蚕・機織りを主題とした美人画（蚕織美人図）の舞台を、宮中に置き換えたものとして理解すべきであろう。

この錦絵の美人画という要素は、世の関心を惹き付けるだけでなく、養蚕という地味な仕事を、美しい女性達によって演出されるきらびやかな世界として描くことにより、未来の労働者たる少女達にとっての憧れの存在を提示するという、国民への教育的な効果を狙ったものとみられるだろう。

参考文献

田島達也「豊原国周「皇国蚕之養育」をめぐる問題：明治前期美人画の一断面」『史料館研究紀要』34: 21-56, 2003.3

本多岩次郎「総論 宮中御養蠶史」『日本蠶絲業史第1巻』大日本蠶絲會 1935.2

加州金澤製糸場之圖【展示番号 5】（三枚続 中欠）



金沢製糸場は、元加賀藩士の長谷川準也（1843-1907 二代金沢市長）らが、士族授産を目的として設立したものである。設計・施工にあたっては、金沢の匠工・津田吉之助（1827-1890）や県下の女工らを官営富岡製糸場に派遣して、製糸に関わる知識・技術を習得させ、1874年8月に開業した。繰糸機100台、女工200人余りを擁する、当時としては富岡に次ぐ規模であった。動力は、富岡が蒸気機関であったのに対して、ここでは水力を用いており、この錦絵で言えば、右図に見える鞍月用水から引かれた水路が、左図中央の煙突の手前から正面の建物（製糸器械場）をつききっており、この中に15馬力の木製水車が設置されていた。

工場は、その後事業の拡大を図り、1877年6月には50人繰りの施設を増設した。しかし、1879年の生糸価格の下落を契機に、経営は振るわなくなり、1888年に閉鎖した。

参考文献

小泉勝夫（編著）『新編日本蚕糸・絹業史』蚕糸業史研究調査会 2019.2

高澤裕一ほか『石川県の歴史』山川出版社 2000.2

本康宏史「津田吉之助再考（一）：在来技術と近代」『石川県立歴史博物館紀要』6: 49-68, 1993.3

※展示会場は図書館閲覧室内にあります。一般の図書館利用者のために静粛な環境の維持にご協力くださいますようお願いいたします。

解説執筆：矢野正隆

発行日：2019年6月28日

編集：東京大学経済学部資料室

発行：東京大学経済学図書館

<http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/>

Instagram @utokyo_rhco